



## 農業への参入事例



## 体験型農業で新たな価値を創出する！

株式会社サナス 南さつま市：食品製造業、加工、小売等販売

### 経営概況

- ・品目：いちご 20a（10品種）、ブルーベリー 約230本
- ・労働力：社員3名（準社員1名）、パート5名

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成25年に参入。12年目。
  - 2 自社のでん粉工場の原料確保を目的として、原料用さつまいも生産農家へウイルスフリー苗を生産・配布するため、阿久根市において農業参入。
  - 3 施設園芸への参入を検討する中で、ピーマンやトマトは既に大手企業の参入が進んでいたため、当時まだ企業参入が少なかった「いちご」を選択。
  - 4 本坊グループの発祥地が南さつま市であり、地域との関係性や地域貢献の側面もあったが、基本は「事業として成り立つこと」を前提に参入。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 南さつま市の協力により農地を確保。
  - 2 もともと雑木林だった土地を整備して、いちごの観光農園をスタート。
  - 3 施設は自己資金中心で整備（当時は補助事業の対象要件に合致せず）。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 いちごの栽培管理技術については、県農業開発総合センターや九州沖縄農業研究センターにおいて研修を受けて習得。
  - 2 品種は、自社で試験・選抜を行い、味を重視して絞り込んだ。
  - 3 観光農園の余剰分を直売所に出荷している。



### 農業参入してよかったこと、今後の展開

- 観光農園であるため、消費者の「おいしい」という声を直接聞けることが最大のやりがである。
- これまで法人向け取引が中心であったが、観光農園を通じて直接消費者とつながることで、ブランド価値の向上に取り組んでいる。
- 今後は、面積の拡張や出荷施設の設備などの規模拡大を図り、市場出荷への一部転換を検討している。

## 地域農家と連携して、有機栽培農業で世界へ！

有限会社ビオ・ファーム 南九州市：食品製造業

### 経営概況

- ・品目：茶 9ha、実験的にハーブ
- ・労働力：常時6人（繁忙期のみ外国人実習生＋3人）

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成10年に参入。27年目。
  - 2 茶の間屋業（販売・流通）が中心である親会社が、原料確保の必要性から、自社での生産部門を立ち上げ。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 焼酎製造業者から、茶園6haと茶製造工場及び機械一式を購入して事業を開始。
  - 2 霜対策や水不足など立地特有の課題がある。
  - 3 平成30年に補助事業を活用により、てん茶工場を併設。
  - 4 原料の約7割は近隣農家から購入し、他農家と原料を融通し合う仕組みを構築。（自社はてん茶中心、他農家は煎茶加工など分業）
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 当初は栽培経験のない社員でスタートしたため、技術面・経営面ともに手探りの状態であったが、茶農家の後継者が参画し、技術の向上を図っていった。
  - 2 抹茶の海外需要が追い風となり、直接または間屋経由で約3割を海外に販売。
  - 3 地域内の他農家との信頼関係の構築が、技術向上と経営安定に大きく寄与する。
  - 4 てん茶・抹茶製造へのシフトにより、収益性が改善した。



### 農業参入する際のポイント、今後の展開

- 地域内の農家との丁寧なコミュニケーションを重ね、信頼関係を構築していくことが重要である。日常的な情報交換を通じて地元住民、農家との交流を深めることで、相互に助け合える関係性が生まれる。
- 外国人技能実習生の従業員についても、地域との関わりを大切にすることで、地域社会の一員として受け入れられ、安心して働ける環境づくりが進んでいる。
- 今後は、抹茶粉碎工場の整備を視野に入れ、生産面においても規模拡大を進めたい。

## 地域と消費者にもやさしい循環型農業への挑戦！

源気ファーム株式会社 霧島市：食品製造業

### 経営概況

- ・品目：水稻0.8ha、養豚(母豚)20頭、原料用さつまいも2ha、そば5ha、大豆2ha、大麦6ha
- ・労働力：常時2人

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成21年に参入。16年目。
  - 2 本業の麹菌の発酵技術を用いて食品残さを家畜用液体飼料に転換する技術（自社技術）を活用し、環境に優しい循環型農業を実践。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 農地は全て借地。水稻、豚肉はグループ会社のレストランや直売所で加工品として販売する分を生産。また、本業やグループ会社の酒類製造等の原料として使用する原料用さつまいも・そば・大豆・大麦の面積を拡大。
  - 2 国や県の事業を活用し、ハーベスタなどの大型機械を導入。繁忙期のみ本社から臨時雇用を入れるが、それ以外は常時雇用2人で運営できている。
  - 3 施設や機械の導入は、中古施設の購入や借入により、初期投資を抑えた。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 本業の麹菌の発酵技術を活用し、養鶏農家の廃棄する卵を麹菌で加工した代替飼料の生産に取り組み、養豚を行っている。
  - 2 麹菌の発酵技術を活用した飼料は、①麹菌由来の酵素が消化を良くし、豚が健康に育つ、②未消化物が激減するため完熟堆肥が短期間ででき、堆肥舎や畜舎周辺の悪臭が抑制される、③豚ふん堆肥利用により作物の増収・品質向上につながるなどの効果がある。
  - 3 安心・安全な原料を使ったソーセージ・甘酒などの加工品をレストラン・直売所で提供・販売しており、観光客にも人気がある。県内外にファンを獲得。



### 農業参入のポイント、今後の展開

- 原材料を自社で生産することで安心・安全かつ品質にこだわった製品を消費者に提供できる。
- 販路が確立しており、本社の状況に合わせて必要な分を生産できている。また、必要な時期に本社から労働力確保もできるため安定して生産が行われている。
- 今後、麹菌の発酵技術を活用し、豚のし尿を液肥化する計画があり、循環型農業の高度化を目指す。

## 目指すは周年収穫！テーマパーク型観光農園！

株式会社さくら農園 霧島市：産業廃棄物処理業

### 経営概況

- ・品目：ぶどう 6.0ha、なし 2.5ha、いちご 0.55ha、その他果実12.0ha
- ・労働力：60人（うち外国人材25人）

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成16年に参入。22年目。
  - 2 「農業をやるなら、鹿児島で作っていないような果樹を栽培したい」との思いから、きんかん、ぶどうの栽培からスタート。日本一の果樹園を目指したい。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 荒廃した山間地や高齢化に伴う耕作放棄地等を購入し、整備。
  - 2 自己資金でハウス等を導入。参入後10年ほど経ってから、補助事業を活用し、加工施設、堆肥製造施設、産直レストランや直売所、農林業体験施設等を導入。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 親会社（下田青果）は青果卸業であり、販路に精通。果樹栽培は生産～販売までの一貫経営が重要であり、販売のバリエーションを増やすため、県内で栽培されていない品目の他に、加工品（乾燥物、ジャム、ワイン、ジェラート等）にも力を入れた。
  - 2 県の普及指導員から栽培技術の指導を受けた。地域で栽培されていない品目・品種については試験栽培や国内の産地で研修を重ね、品目及び品種の選定に取り組んだ。
  - 3 令和元年から技能実習生を受入れ、現在は特定技能も在籍。男子寮・女子寮、作業マニュアルを整備し、毎週日本語教室も開催。品目も多く、栽培管理の他に加工、販売など業務にバリエーションがあるため、果樹の多様な技術を学べる環境であり、長く働く人材も多い。
  - 4 産直レストランや直売所、農林業体験施設、ワイン製造見学工等を有する県内でも有数の大型観光農園として、県内外から観光客が周年来場し、地域振興に貢献している。



ぶどうドーム・バベキュー



ワイナリー



霧島さくら館

### 農業参入のポイント、今後の展開

- 新規で農業を始める場合は、自己資金の範囲で取り組んだ方がよいと考える。品目や品種の選定は時間がかかるため、自己資金の範囲であれば継続の可否を判断しやすい。規模拡大や加工等に取り組む段階で補助事業等を活用した。
- 現在の面積、品目で周年で収穫を行う計画である。グリーンツーリズムや国内外の観光客呼び込みに力を入れ、地域一体となり、観光と農業を盛り上げていきたい。

## 建設業のノウハウを生かしつつ、農業と2本柱で21年目に突入！

株式会社 本産業 南さつま市：建設業

### 経営概況

・品目：葉たばこ かぼちゃ 合計 4.5ha ・労働力：常時3人

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成15年に参入。22年目。
  - 2 昭和43年に牛乳の製造、配送・販売業を創業。その後、建設業（本建設）を開始。乳業が転換期を迎え、建設業の閑散期に雇用を維持するため、農業に参入。
  - 3 参入当時、価格が安定していた葉たばこの生産を開始。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 農地は全て借地。農業委員会や農家に直接交渉に赴き交渉し、機械等の移動のロスが少なくなるよう、農地の交換などをして集積した。
  - 2 機械等は自己資金で購入する他、引退する葉たばこ農家から中古の設備や機械を購入。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 平成15年、葉たばこ生産開始。平成18年、裏作でかぼちゃを導入。令和2年から太陽光発電事業も開始。
  - 2 同じ品目の先輩農家から技術指導を受けた。
  - 3 葉たばこは、JT（日本たばこ産業）と全量契約のため、A品率向上に専念できる。
  - 4 農業機械の操作やかん水設備の設置などは建設業のノウハウを生かしている。また、本業で使用している大型トラックを設備や機械の移設・運搬に使用することで、投資の節約と規模拡大ができた。
  - 5 農業は長男、建設業は次男が代表を務め、役割を分担。繁忙期には建設業の社員とリタイアした社員を臨時雇用できるため、労働力は安定して確保できている。
  - 6 葉たばこと地域の特産品であるかぼちゃを生産する担い手として、地域活性化に貢献。



### 農業参入のポイント、今後の展開

- 建設業と両立するには、無理のない計画、運転資金の確保が重要であると考えている。また、農業は好きでないと続かないし、臨時雇用への指導も丁寧に行わないと良い品物ができないと感じる。
- 建設業の仕事が減少した時を見越して、農業にもしっかり投資した。現在では売上げを確保でき、建設業を引退した従業員の再雇用先になっている。今後も継続していきたい。

## 「福祉と農業」を繋げ、地域を支える！

合同会社グッドフィールド 阿久根市：就労継続支援A型事業所

### 経営概況

- ・品目：柑橘類、さつまいも、じゃがいも、水稻、ブロッコリー、施設野菜（なす、いちご等）、水耕栽培（小松菜・リーフレタス） 自社農場22ha
- ・労働力：常時23人

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成30年に参入。8年目。
  - 2 経営主夫婦は元養護学校教諭。妻の実家が柑橘農家であり、養護学校の生徒に収穫作業体験などを実施。その人の特性に合った作業や、特技、スキルに応じた仕事や環境を整えれば障がいを持つ方も農業ができることを実感。就労継続支援A型事業所を設立後、農業へ参入。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 農地は全て借地。
  - 2 水耕栽培も実施。天候、病害などの影響を受けにくく、土づくりの手間もなく、短期間で安定して生産できる魅力がある。初期投資はあるが、利用者が働きやすい環境を作ることもできる。コストや設備の機能など、資材メーカーや実際に導入している農場を視察し、導入した。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 品目はみかんからスタート。年間を通して利用者の作業があるように品目の組み合わせ、作業のバリエーション、作付け面積を調整している。
  - 2 ネット販売、ふるさと納税返礼品など複数の販路を確保するとともに、県内外の農家から販売方法や販路開拓（輸出も含む）の情報収集を積極的に行っている。
  - 3 自社のさつまいもを干し芋に加工するなど、6次化にも取り組んでいる。令和6年に鹿児島市天文館にサツマイモスイーツ専門店「3515(さんごじゅうご)」の経営を引き継ぎ、焼き芋ブリュレなどを販売。利用者の新たな就労先や、農産物のPR、ファンの獲得にもつながっている。



### 農業参入のポイント、今後の展開

- 水耕栽培は、年間を通して計画的な作業ができるので、農業の技術や経験が少ない方でも取り組みやすいと思う。
- 利用者が安心して作業ができるよう、年間を通して、作業のバリエーションがあり、1人1人の特性や好みにあった仕事・環境づくりを心がけている。

## 美味しいものを鹿児島から！自信をもって生産・販売

岡山フードサービス株式会社 南九州市：食品卸売業

### 経営概況

- ・品目：養鶏 常時9,500羽、茶 53a、山椒 40a
- ・労働力：40人（うち外国人材10名）

### 農業参入の動機・事業展開の特徴

- 参入の時期・動機
  - 1 平成25年に参入。12年目。
  - 2 食品卸売業として30年以上。飲食業、食品加工業も展開。食材は国内外の現地に赴き、仕入れている。将来、卸売業がなくなる可能性と、安心・安全な良い食材を自ら生産・加工し、消費者へ届けたいとの思いから本社直轄事業として参入。
- 農地の確保及び施設の導入
  - 1 農地は全て借地。
  - 2 平成25年に第一農場を知覧に設置。自社生産を試験的に開始。品種、エサ、飼育環境などを5年間研究。収益性も確認し、平成30年に第二農場を新設。
  - 3 平成27年、南九州市と立地協定を締結。
  - 4 鶏糞の堆肥化を使用した、循環型農業の実践を目指す。令和2年から南九州市から農地を借上げ、茶、山椒の栽培を開始。さつまいも、柑橘の試験栽培も実施。
- 生産技術の習得、販路の獲得
  - 1 鹿児島で出会った肉用鶏に感動し、5年の試行錯誤の結果、長期独自肥育の「さつま極鶏 大摩桜」（さつまきわみどり だいまおう）をオリジナルブランド鶏として販売。
  - 2 農場内の処理場で一羽ずつ手捌き解体しパッケージまで行う。令和元年に第一農場の隣に農場直売所をオープン。
  - 3 令和7年12月から「さつまAgri・Base(株）」（100%出資の子会社）で鶏糞を堆肥化して農作物の栽培に使用している。
  - 4 関西エリアを中心に販路があるため、県内の農産物の販路支援も取り組んでいる。



### 農業参入のポイント、今後の展開

- 品種、飼育方法の研究とともに加工、市場での評価及び販売テストを実施。そのため、参入してから黒字になるまでの期間は長かった。
- 消費者に対し、自社ブランドの品質・安心・安全へのこだわりと美味しく食べてもらえる加工品を提案できる魅力がある。
- 今後は循環型農業及び他品目の栽培にも力を入れ、鹿児島の美味しい農畜産物生産を持続させていきたい。